

2020年度 教育の事業報告

1、校内研修会の取り組み

年間テーマ「100周年の節目にみんなで考える

－ 変わらないものと変えていくもの・生み出していくもの－」

1) 1学期 2020年8月3日(月) 9:30~12:00

内容：小グループに分かれての話し合い

テーマ(3つ)：

- ・「聴覚を使っていくことに関しての現状と課題」 - 補聴器、人工内耳、発音発語、病院との連携 -
- ・「私たちは子どもがどう育っていくことを願って教育を行うのか」
- 現状と今後、インテグレーション、キャリア教育など -
- ・「生徒減少についてどう考えていくか」

年間主題である「100周年の節目にみんなで考える－変わらないものと変えていくもの・生み出していくもの－」を念頭に、本校の教育課題となる点を3つに絞り、今後どのように取り組み進展させていけばいいのかについての話し合いの時を持った。近年の補聴機器の進歩で届けられる「聞こえの確保」と本校が人間教育として求める「聴く力」の本質的な違いを確認しつつ、各自が経験を通じた実感を語り合い、今後への願いを分かち合う研修となった。

2) 2学期 2021年12月23日(水) 9:00~16:30

内容：1学期研修会の議論をさらに掘り下げるための小グループによる話し合い

テーマ(3つ)：

- ・「親に伝える力」 - 一人ひとりが日聾教育を言語化し伝えるということ -
- ・「共働き家庭(母子就労)への対応」 - 社会の変化への順応と守るべきもの -
- ・「インクルーシブ教育」 - 健聴児・他の障がいを併せ持つ子の通える学校 -

本校の教育をかたちづくる現場教師一人ひとりが、日聾教育やその在り方についての想いを語り合い、大切にしたいことを共有することを通し、今後への新たな歩みを生み出していく機会とすべく話し合いの時を持った。日聾の教育理念を全校で共有できている実感を持ちつつも、それを体現する教育活動の教育力(実践力)こそが求められていること等、今後への願いや課題を分かち合う時間を持つ研修となった。今後もこの時代にあって歩む方向と果たす役割とを見出していくための研鑽を重ねていく必要がある。

3) 3学期 2021年3月25日(木) 9:00~12:30

内容：「各部1年間の研修報告－研修の内容、重点事項確認、今後の課題－」

各部1年間の取組と今後への課題についての報告を全校で分かち合い、この教育における自分たちの立ち位置を確認し合う研修の時を持った。

2、各部2020年度重点課題の取り組みと2021年度へ向けての課題

1) 乳幼児(ライシャワ・クレーマ学園)：

「ライシャワ・クレーマ学園の教育活動－確認とまとめ－」の見直し、他

- ・オンラインでの取り組みを余儀なくされる中、乳幼児教育の本質、大切にしたいことを改めて確認する必要を感じ、「ライシャワ・クレマ学園の教育活動の確認とまとめ」に取り組んだ。
- ・ケース会議では保護者に分かりやすく、また、現状に適した助言ができるよう「教師の助言の質を高める」研修を行った。オンライン個別の実践をケース会議として取り上げ、親子の良い点、今後の課題、そして、教師の関わりや助言などについての課題を出し合った。毎回の個別が家庭訪問のようで、家庭の中での工夫点、問題点が分かり、より具体的な助言をするための学び合いができた。

(2021年度へ向けて)

- ・軽度難聴の子どもや、人工内耳手術を1歳代で受けたり、両耳人工内耳にして成長がはやい子どもが増えている等、保護者が幼稚園段階からインテを考えるケースが出てきている。表面的に見えることばの成長だけでなく、心の土台が重要であること、本校の教育で大切にしたいことを年齢の小さなうちから保護者に伝えていく必要が起きている。
- ・視覚優位でなかなか聴覚に結びつかない子どももいて、そのような子に対して音と意味をどのように結び付けていくかが重要で、そのための研修の必要がある。
- ・時代によって子どもの姿、保護者の考えが変わってきている。本校の教育の土台となる変わらないものは大切にしつつ、時代に合わせて対応していくことが求められている。

2) 幼稚部：「すすんで、友だちや遊び・活動に関わり、ことばと豊かなところをはぐくむ

— 今の子どもの姿を見取り、必要な活動や環境を設定する — (1年目)

- ・コロナ感染予防対策をとりつつも、日躰教育として何を大事にしていくかの視点に立ち返ることを意識し、一つひとつの活動をどうしていくべきか意見を話し合い、できる限り通常の教育を行うよう取り組んだ。
- ・ケース会議では、個別 VTR だけでなく、食事の様子、保護者の想い、ことばの成長のゆっくりさ等、様々な視点から自由に意見を出し合うことで、その子どもの見方が新しくされ、新たな気付きも与えられた。
- ・交流幼稚園での補聴環境をより良くするためにオーディオロジー部との合同研修を行い、ロジャーやミニマイクについてのマニュアルを作成し、交流への説明も行った。

(2021年度へ向けて)

- ・幼稚部教育の充実のために、子どもにとってのより良い環境設定を模索していきたい。
- ・ケース会議は担任以外にとっても子どもへの理解を広げ、すぐ翌日からの関わりに活かせることが多く貴重な機会である。次年度以降も、発達面で課題の多い子どももいるため、専門家の意見を取り入れつつ、幼稚部教員皆で関わり考えていく取り組みを大切にしていきたい。
- ・コロナ感染予防対策下では、幼児にとっての身近な食べ物に触れたり食べたりする活動での制限があったりと難しさはあるが、互いのトピック活動を見合うことをするなどして、さらに幼児らしい活動を模索していきたい。

3) 小学部：「子どもの事実を共有し、インタラクションの本質とその深まりを学び合う」

- ・VTR 分析（個別とグループ）では、ことばとして現れていない子どもの見取りを大切にしつつ、子どもへの期待値を更に高く持つことと、インタラクションの深まりについて踏み込んで学ぶ研修に組み込み、教師自身の立ち振る舞いや子どもの発言、つぶやきを客観的、多角的に捉え学び合う機

会となった。その中で、子ども個々には子どもの発達段階に沿った「ねらい」「題材」「教材」「関わり方」があり、その上で「何を深めたいのか」という思いが教師には不可欠であることが浮き彫りとなった。

- ・子どもと共に編み出す活動である生活・総合の取り組みを学び合い、子どもの姿・活動を見取り振り返ることで、視野を広げる大切な機会となった。また、外部オンライン研修会（信州大学教育学部附属長野小学校、伊那市立伊那小学校）に参加し、生活・総合の実践に触れたことで各々の教育観が拡充した。

（2021年度へ向けて）

- ・個別 VTR の学びでは、教師の実践経験を重ねるだけでなく、保護者へ子どもの成長を伝えるためには発達についての学びの必要を強く感じている。子どもの縦の成長が見えることで、教材やねらいがより定まり、インタラクションが深まるのではないかと。
- ・コロナ禍で、互いの授業を見合うことと子どもの姿を共有することの機会が少なくなってしまったので、授業研究会を実施したい。子どもたちの聴こえの進歩に甘んじることなく、どの学習においても「人・もの・こと」との出会いを大切にしたい子どもにとって必然のある学びとなるよう、授業を見つめ直す機会としていきたい。

4) 中学部：「自己の内面を語れる生徒～経験（体験）を通した生きたことばで語り合う～」

- ・コミュニケーション上の課題は一人ひとり異なるが、思春期にある生徒たちが日躰教育で培われてきた力を土台として、自己を見つめ、他者との関わりを深める中で、自らの可能性を広げること。そして、一人の人間として他者と心が響き合う経験を重ねることで、共に高め合う関わりを築いていくことを願っての教育活動に取り組んだ。
- ・オーディオロジー部と連携し、オンラインを活用したグループインタラクション（教科の授業）を試みての研修を行った。教師間で、生徒の聴き取りの様子や、どの教科までオンラインを行うことが有効か等の検証を行ったが、幼少期からの具体的な生活体験やインタラクションの積み重ねがいかに重要であるかを確認した。

（2021年度へ向けて）

- ・2020年度の授業研究に関しては、コロナ感染のリスクを鑑み十分な取り組みができなかった。教え込むのではない、グループインタラクションを軸とした生徒と共に考え学び合う授業について考える授業研究に取り組んでいきたい。

5) オーディオロジー部：

「子どもの様子から見えたことを共有し、必要なサポートを行う」

- 教育オーディオロジストとしての力量を高め、子どもに最適な音を届ける -

- ・幼稚部の交流保育で活用していたワイヤレス補聴援助システムが新機種的人工内耳に不都合が生じるようになったため、以前から検討していたデジタル化に踏み切った。大きな受信機や有線コードを使わなくなり子どもたちへの負担を大幅に減らすことができた。
- ・コロナ禍で授業レベルでのオンライン対応の必要が生じたことから、小中学部の実際の授業に立ち会いながら音声を聞こえやすくすることに取り組んだ。個々の機器やネット環境の違いがあるため、それぞれへの個別対応が大切であることが分かった。

(2021 年度へ向けて)

- ・良い補聴環境を提供できるように新しい補聴器等の情報を集め、定期的に検討をしていきたい。
- ・人工内耳、補聴器共にワイヤレス化が進んでおり、赤外線補聴システムと接続するのが難しくなりつつあるため、補聴システムも含めて今後どのようにしていくのがベストなのか検討をしていく必要がある。

3、新型コロナウイルス感染症への対応

1) 教育活動における対応

- ・4月、5月は休校としたが、5月7日よりオンライン等の取り組みを段階的に展開するなどして家庭への教育活動を確保した。
- ・6月1日より学校での教育活動を再開。入学式は全校では行わず、部毎に実施。「新型コロナウイルス感染症対策マニュアル」を作成し、健康及び衛生管理、教育活動における感染予防対策を徹底して行い、分散登校、時差登校を段階的に取り入れながら取り組んだが、宿泊行事（幼稚部お泊り会、小中学部夏期学校）は中止とした。
- ・2学期以降は、登校時手洗い等の健康衛生管理の徹底をして校内での平常授業確保はしたが、大人数での活動自粛の必要から学芸会・展覧会、クリスマス等の行事は、規模縮小の工夫対応実施となった。交流教育に関しては関係幼稚園及び小学校との確認の中で再開した。
- ・中学生の下校時間は、公共交通機関混雑と感染予防の観点から午後3時30分とした。また、体育関連大会（関東陸上大会、東京都及び関東野球大会）は中止となり、対外的な教育活動が実施されなかった。
- ・12月中旬以降の感染拡大第3波の動きに対応し、3学期予定の宿泊行事（小中学部冬期学校、中3生修学旅行）を中止すると共に、学年度末の教育活動への影響を鑑み幼稚部交流保育と小学部高学年クラブ交流を休止とした。
- ・卒業式は出席者を卒業学年の幼児、児童、生徒、保護者、及び関係者に絞り、規模縮小で実施。

2) 教育への影響とその対策

- ・マスク着用による声や聴こえへの影響は避けようもなく大きいですが、子どもたちの聴き取りや会話への適応力に驚かされることが多かった。しかし、本質的な「聴く力」を追求する姿勢と、それを育む取り組みをしっかりと進めていく必要がある。
- ・本校一貫教育としての聴覚主導の人間教育を実感できる「入学式」「運動会」「学芸会・展覧会」「卒業式」の喜びと感謝の時を、在校生、保護者、教職員で分かち合えなかった教育的損失は大きい。また、朝の健康チェックや放課後の消毒作業等が教師への負担増となっている。
- ・不特定多数者との接触が心配される校外学習や宿泊行事等も自粛や中止の判断とせざるをえなかったが、学びの質の確保をする工夫として、校内での代替活動（日聾クラブや凧揚げ大会等）を実施した。
- ・感染への心配から登校を控える生徒へは、自宅からオンラインでの授業参加の対応をとった。
- ・4月予定の創立100周年記念礼拝は延期せざるを得なかったが、9月に全校で改めて創立記念週間を設け、部単位で感謝と喜びの時を持つことができた。

4、その他

1) キリスト教学校教育同盟 第108回総会特別プログラムでの発表

- ・期日：2020年11月7日（土）
- ・会場：桜美林学園新宿キャンパス
- ・発表内容：「日本聾話学校の教育 - 愛すること、信じること、そして待つことを通して - 」

2) 聴覚を活用した聴覚障がい児教育オンラインセミナーの実施

- ・期日：2021年2月26日（金）
- ・内容：事前の講演映像配信と当日質疑
- ・映像配信（動画再生延回数 1351回）
 - (1) 講師：神田 幸彦 先生 神田 ENT 医院 院長
「難聴児療育システムの構築と補聴器・人工内耳での療育の成果」
- 日本中での厚労省研究も含めて -
 - (2) 講師：南 修司郎 先生 国立病院機構東京医療センター耳鼻咽喉科 医長
「聴覚主導教育の歴史 - Sky is the limit ! - 」
 - (3) 日本聾話学校「聴いて育つ、輝くいのち」聴覚の可能性を求める本校の実践
- ・当日参加者：136名

3) 100周年第2期工事実施

- ・期日：2020年8月1日から8月31日
- ・場所：小中棟2階北側改修工事

特別教室である理科室、理科準備室、個別室の改修を行い、理科教育及び個別対応への環境が整えられた。理科室は新しく学習環境が整備されたことで児童生徒が進んで実験等に臨みやすくなり、またプロジェクターが設置されたことでICT教育への取り組みも進めやすくなった。

3) ネットワーク環境工事

- ・2020年8月

「ネットワーク機器・環境工事」の国庫補助により、校内のネットワーク環境を整えることができた。この事により各部の教育の必要に応じたオンライン対応が可能となりコロナ禍での教育活動に備えることができた。